

土佐国大忍庄 「安芸文書」の成立過程

村上 絢一

MURAKAMI Junichi

【要旨】

土佐国大忍庄おおさとのしょうは、現在の高知県香美市から香南市に及ぶ領域に存在した中世荘園である。その北東部の山間・丘陵地帯では、専当と称された荘官や名主の系譜を引く家に少なからぬ中世文書が伝えられた。そのうち、最大の中世文書数を誇るのが「安芸文書」である。「安芸文書」には、内容や宛所を異にする様々な文書が混在する。これに関して横川末吉は、「中世を通じて名主の身上に変動のあったたびに、古文書は新しい権利の所有者の間に転々した」と指摘する。本稿は、横川の指摘を踏まえ、「安芸文書」に含まれる文書を系統分類し、いつ、どの文書が、どの段階で、どの文書群に包摂され、そして「安芸文書」を構成するに至ったのかを追究する。これにより、「安芸文書」は、〈専当職并国弘名文書〉＋〈清遠名文書〉↓〈東川専当職文書〉↓〈山川文書〉＋〈ブレ畑山文書〉↓〈畑山文書〉↓「安芸文書」の順に、元の所有主体を異にする文書群が次々と包摂され、形成されたことが明瞭となった。他家の文書群に伝わる中世安芸氏関連文書が、近世において筆写され、その写が「安芸文書」に混入された事実は、中近世を通じた文書管理の実態や近世における文書認識について再考を促すものである。本稿では、安芸・畑山の地から離れた土地に関する文書の伝来過程や、名主層における家文書の形成を規定したであろう大忍庄の地域的特質を、今後の検討課題として指摘する。

キーワード

古文書・文書管理・大忍庄・安芸庄・畑山・安芸文書・行宗文書・柳瀬文書・深淵神社

はじめに

土佐国大忍^{おおしのしやう}庄は、現在の高知県香美市から香南市に及ぶ領域に存在した中世荘園である。その北東部の山間・丘陵地帯（槇山・東川・西川の三地域）では、専当と称された荘官や名主の系譜を引く家に少なからぬ中世文書が伝えられ、それらの多くは『土佐国蠹簡集』等の近世の編纂になる史料集に採録された^①。近代に至り明治二十一年（一八八八）には、東京大学史料編纂所の重野安繹が、安芸・行宗・末延・小松・柳瀬・岡内・村上・小松・山崎等の諸家に伝わる中世文書を採訪した。この時作成された影写本をもとにして、一九五六年には『近世村落自治史料集第二輯 土佐国地方史料』（以下『地方史料』）が刊行された。

この『地方史料』の刊行以後、大忍庄の研究は本格化する。一九七〇年までには、山本大・秋澤繁^③・横川末吉^④・正木喜三郎^⑤・黒川正宏^⑥等が、主として名田経営論への関心から研究を進め、一九七〇年代には、神木哲男が貨幣に注目した研究を発表し、山本大が『高知県史古代中世編』（一九七一年）で概説を記した。一九八〇年には、湯山学が鎌倉時代における大忍庄の領主が鎌倉極楽寺であったことを論証し、以後、吉田萬作^⑩・甲藤進一^⑪・福岡彰徳^⑫・秋澤繁^⑬等が、これらの成果を批判的に継承した総括的な論稿を発表した。近年では秋澤繁^⑬のほか、米家泰作や楠瀬慶太^⑮等が景観論の分野で成果を挙げている。

さて、大忍庄に関する文書群のうち、最大の中世文書数を誇るのが「安芸文書」である。この「安芸文書」を一瞥すると、内容や宛所を異にする様々な文書が混在していることに気づかされる。これに関して横川は、「中世を通じて名主の身上に変動のあったたびに、古文書は新しい権利の所有者の間に転々したものと思われる。すなわち名主の成長発展があれば名田関係の譲状、売券、宛行状、補任状等は、その名主の手

に集められる結果となるのであって、安芸文書が多くの名主に関する文書を収めているのは以上の理由に基づく」と指摘する^⑯。右の指摘に従えば、その時々々の文書の所有主体を確定し、文書群成立の過程を明らかにすることは、「安芸文書」の理解において、不可欠の作業といえる。ところがこれまでの研究では、伝来系統を異にする文書の内容を混同して、安芸氏あるいは後述する畑山氏の性格を規定する誤りも散見する^⑰。そこで本稿は、「安芸文書」に含まれる文書を系統分類し、いつ、どの文書が、どの段階で、どの文書群に包摂され、そして「安芸文書」を構成するに至ったのかを追究する。

ところで中世古文書学の構築を図る上島有は、文書を「かたち・かたまり・かさなり」の三相において把握すべきことを提唱する^⑱。これを本稿筆者なりに解すれば、例えば書状や売券は、それ単体では機能し得ず、包紙や連券等と「かたまり」を成して機能し、「かたまり」はやがて堆積して「かさなり」を作り、異なる「かさなり」は一つの文書群を構成する。本稿の作業は、「安芸文書」から、文書の「かたまり」や「かさなり」を析出する作業と言っても過言ではない。以下、仮説的に復元した文書の「かさなり」は〈 〉で表す。「安芸文書」の引用にあたっては、『地方史料』収載「安芸文書」（全三一四通）^⑲の番号を安芸〇〇と記し、東京大学史料編纂所所蔵影写本（以下、影写本）を以って原文書通りの改行と校訂を施す。引用史料中の返り点は引用者による。文書の年月日は特に必要なものを除いて年のみを記す。

一 〈専当職并国弘名文書〉の形成

【史料1】は、「安芸文書」において専当の存在を示す最古の史料とされるものである^⑳。

【史料1】(安芸一四)

- 「当請逗之公事人名以下の
- 「付、取別西分公事口人
- 「口之儀利をちかゑ候ニ依、度役
- 「ゑハ、
- ^{日本}国中之大小神儀之御罰を
- 「候ハするに、とりわけ東川四所之宮
- 「御罰をこふり候ハするに、新左衛門とのゝ
- 「子孫之名本ニ、見可申物也、たとい
- 「にて候共、別成名本を見申
- 「なり、為^レ其罰文状如^レ件、

「□仁武年二月十日 専当新左衛門尉(花押)

東分公事人(筆軸印) 西分公事人田中(筆軸印)

(筆軸印) (筆軸印)

「之公事人(筆軸印) 小坂平田 二郎兵へ(筆軸印)

小屋之中(筆軸印)

『地方史料』は【史料1】の年号を「永仁」と翻刻するが、影写本を見る限り、当該部分が「永」の残画であるとは思えない。専当新左衛門は、永享十一年(一四三九)²³⁾頃から文正元年(一四六六)²⁴⁾までの文書に存在が確かめられる山川新左衛門(後述)とみられ、【史料1】は応仁二年(一四六八)のものかと思われる。そこで本稿では、最初に存在の確かめられる東川専当を、元徳二年(一三三〇)の売券(安芸三一)に記される、正延名主家綱が字「加治安」の水田三十代を二貫五百文で売却した相手、専当刑部と考えるものである。

至徳三年(一三八六)に東政所家弘は「先専当光道」の売券状に任せて、「大忍庄東川国弘名并専当職」を専当藤兵衛大郎に与える宛行状

(安芸七九)を発給し、嘉慶元年(一三八七)には上御使沙弥某が、国弘名を藤兵衛太郎に預け置く宛行状(安芸八二)を発給している。この時期、専当職は国弘名と一体となって宛行われている。

国弘名に関する最古の文書は、正安元年(一二九九)十月十四日に「国弘名畑請料銭」のうち三百六十文を免除した袖判免除状(安芸一七)である。この袖判免除状には、請料銭の免除が極楽寺に申請された旨の記載があり、鎌倉極楽寺長老忍性の袖判をもつ弘安元年(一二七八)の「大里庄内若王子宮別当職」補任状²⁵⁾と極楽寺三世順忍の袖判をもつ文保三年(一三一九)の大忍庄「若王子別当職」補任状²⁶⁾と並んで、鎌倉時代における大忍庄の荘園領主が極楽寺であったことを示す史料と指摘される²⁷⁾。次いで延元三年(一三三八)の寄進状(安芸四二)は、大忍庄の預所源重信と源光信が「東河国弘名内居内田地」三十代を「大忍庄東河今権現料田」としたものである。

藤兵衛入道道本は、永和五年(一三七九)二月二十五日に「大里^{マヤ}庄東川専当職国弘名」を娘の姫犬に与える譲状(安芸七一)を作成し、同月二十七日には出挙の質として三段の田地を覚道から受領した旨の請取状(安芸七二)を作成する。これに対して覚道は、同年五月十三日に重代相伝の「樋口田」十五代を左近允に与える譲状(安芸七三)を作成し、同日には「東河国弘名内田畠山地」を娘の姫鶴女に与える譲状(安芸七四く七六)を作成する。そのうちの一通(安芸七六)では、道本の娘姫犬が成人の後は、国弘名を姫犬に譲るべきことを定めている。ここから、道本―姫犬と覚道―姫鶴女の二つの系統による国弘名の領有が窺われる。

前述の通り、専当藤兵衛太郎は至徳三年の宛行状(安芸七九、前掲)により「大忍庄東川国弘名并専当職」を与えられる。その一方で、翌年には「東河専当」が「東河専当国弘名」について「親父道本」の出挙に関する「御下知手継共」の文書を拝領したところ、「覚道負物」の領地

はこれを返還すべきとの「仰」を受け、「孔子形修理田」一段を萩原殿御内^②に預ける起請文（安芸八一）を作成している。この「東河専当」は、道本の娘姫犬と考えられる。

いずれにせよ、国弘名を藤兵衛太郎に預け置く嘉慶元年の宛行状（安芸八二、前掲）の発給時点で、専当職と国弘名に関わるこれら一連の文書（専当職并国弘名文書）は、藤兵衛太郎のもとに集積されたと考えられる。

次章では、〈専当職并国弘名文書〉から考察の対象を転じて、〈清遠名文書〉の内容を検討する。

二 〈清遠名文書〉の形成

先行研究によると、現在の高知県香南市香我美町山川には「清遠ヤシキ」の地名があり、その上方の中山川土居城跡には、寛政十一年（一七九九）建立の「清藤古碑」がある。その碑文には「我姓祖光弘、姓物部、氏清藤」の一節がある。先行研究ではこの光弘を、次の【史料2】にみる佐伯光弘と同一視する見解でおおよそ一致している。^②

【史料2】（安芸一九）

宛給 東河百姓清遠名□^③

佐伯光弘所

右先名主正弘、云々色々御年貢□

懈怠、云々盗人同家之罪科、現条々

取調之間、所^レ宛^レ給于光弘也、然者

恒例臨時御年貢・御公事、不^レ致^レ懈怠

可^レ勤仕之状如^レ件、

正安二年十月三日

先の「清藤古碑」碑文が【史料2】に基づいて記されたかは不明である。ただし、『土佐国蠹簡集』に「香美郡山北村善藏」として採訪された元亨元年（一二三二）の袖判下知状^④には「清遠名氏光弘」の署名があることから、光弘の存在はひとまず首肯される。

つぎに【史料2】以前・以後の清遠名に関する史料を検討する。

【史料2】以前には、正安元年十月十四日の「清遠名畑請料銭」の免除状（安芸一六）がある。これは「国弘名畑請料銭」の袖判免除状（安芸一七、前掲）と発給年月日を同じくし、ほぼ同文であるが、「在御判」と記されるのみで袖判は無く、筆跡は互いに相違する。『土佐国蠹簡集木屑』には、この二つの免除状と同文で「被山守利名畑請料銭」を免除する文書が「槇野山郷根木屋村名本臺平藏」として採訪されており、これらの免除状は大忍庄で一斉に発給されたものと考えられる。安芸一六はその案文であろう。

【史料2】以後には、清遠名の開発を命じた文保二年袖判政所下知状（安芸二五）、清遠と末延の相論を裁定して「清遠名新田并屋敷」を清遠に与える元亨元年の袖判宛行状（安芸二七）、「非器量之仁」右近四郎に代えて清遠名主職を後家阿弥陀仏に与える暦応二年（一二三九）の宛行状（安芸四四）、「重代相伝之道理」に任せて清遠名を守助に与える永和二年の袖判補任状（安芸七〇）がある。

これらの清遠名に関する文書（清遠名文書）にみる人名は、〈専当職并国弘名文書〉にはみえないことから、両者は別に相伝されたものと考えられる。

ここで〈清遠名文書〉と〈為貞名文書〉の関係について言及しておく。先に永和二年の袖判補任状（安芸七〇、前掲）に守助なる人名をみたが、明徳三年（一二三二）には、清遠物部守介が重代相伝の名田たる為貞名を子息二男牛楠に与える讓状（安芸八六）を作成している。この

守助と清遠物部守介が同一であれば、これ以前に発給された為貞名に関する文書（為貞名文書）、すなわち、「国貞名内梅サコ田」の請作料とみられる六百文を「本名為貞方」へ返すべきことを命じた建武五年（一三三八）の書下（安芸四〇）と、政所が「為貞名之本証文」の焼失を確認した貞和三年（一二三七）の畠坪付（安芸四八）の二通は、明徳三年に〈清遠名文書〉に包摂されたと想定できる。以後も、応永三十四年（一四二七）に山口の次郎衛門が預かり状（安芸一二七）を以って請作した「為貞本名」内三分二は「東川清遠殿重代相伝田畠」となっており、為貞名は継続して清遠氏の所有に帰したと解される。

三 〈東川専当職文書〉の形成

至徳四年に「東河専当」が萩原殿への起請文（安芸八一、前掲）を作成してから七年後、東川専当職は清遠氏に宛行われる。

【史料3】（安芸八七）

土佐国大忍庄 東川専当

職之事、就中雖為相論

之地、依為清遠衛門尉

理運、宛行之処也、仍

為後証之、下知之状如件、

明徳五年七月二日

義久 在判

清遠衛門尉

第一章で確認した通り、これ以前の専当職は国弘名と一体となって宛行われた。専当職は国弘名を継承する一族で相伝され、領主によってその領有が追認されたとみられる。ところが【史料3】以後、応永年間に

通じて、大忍庄東川における専当職は、「東川専当職」の名称に固定して、清遠氏に宛行われていく。

応永元年に東川御代官某は、「先例しせう」^{（支証）}によって「ゆいしよ」^{（由緒）}を主張する清遠の多もん^{（器用）}のせう（東川専当清遠衛門允）に「きよう」^{（器用）}を認め、これに東川専当職と「名田屋敷畠」を与える宛行状（安芸八九）を発給する。この清遠の多もん^{（器用）}のせうは、【史料3】の清遠衛門尉と同一とみられるが、ここからは〈清遠名文書〉を保持する清遠氏が〈専当職并国弘名文書〉を獲得し、これを「先例しせう」と主張した事態を想定できる。清遠衛門允に東川専当職を与えた応永十三年の下知状（安芸九六）においても、清遠氏は「数通文書」を所持していたと記される。この清遠衛門尉のもとで、〈清遠名文書〉が〈専当職并国弘名文書〉を包摂して形成された文書の「かさなり」を、ここでは〈東川専当職文書〉と称したい。^{③②}

こうして清遠衛門尉は「東川専当職」を獲得するが、その権利は盤石なものではなかったらしい。応永十四年には前年に清遠衛門尉へ与えられた東川専当職を転じて道念入道に与える宛行状（安芸九七）が発給され、応永十六年には再び清遠右衛門尉に東川専当職を代官として預け置く旨の預け状（安芸九九）が発給される。応永二十一年には「自京都之仰ま」に、東川専当職を広瀬方分王子中坊に与える打渡状（安芸一〇七）が発給され、同年には「先例」に任せて「油小路殿時渡状」により「上意」として東川専当職を清遠右衛門尉に与える宛行状（安芸一〇八・一〇九）が発給される。

これらの宛行状は、道安、智達、義貞、広瀬之定を発給者とする。智達は槇山「岡内家文書」にある応永十六年のいちうの二郎^{（代官）}も宛て宛行状に「御大くわんひろせの入道智達」とみえ、また広瀬之定は応永二十一年から同三十三年の宛行状（安芸一〇三・一二一・一二六）、応永二十三年の「清遠沙汰分」請取状（安芸一一三）、「岡内家文書」永享五

年十二月二十五日の横山専当宛て宛行状^②にみえており、広瀬氏が横山と東川を管轄する代官であったことが分かる。先行研究では、この時期の大忍庄の支配系統は、「管領家―阿波細川家―大忍庄代官」と想定され、広瀬之定はこの系統に連なる人物、義貞は「大忍庄代官」と推測されている^③。

応永二十二年には、官米の質として水田を専当藤左衛門殿の「御内」かちやしき衛門に預ける「宛状」(安芸一一二)が発給される。よって、この年までに東川専当職は藤左衛門に宛行われ、〈東川専当職文書〉は、新たな宛行状も加えて、藤左衛門の手に渡ったものと考えられる。

他方、応永年間の文書には、東川二郎兵衛なる人名が散見する。応永十九年には東川清遠名にある字「ノサハ」の水田十代を浄覚から清遠二郎兵衛殿へ売り渡す売券(安芸一〇二)が作成される。これ以前の応永十一年には、為員名田畠七反二十五代を清遠守重から清遠之二郎兵衛へ売り渡す売券(安芸九四)が作成され、応永二十三年にも「東川専当名匁子分」字「ヒノクチ」の田地を清遠山川物部守重から清遠の二郎兵衛嫡子へ与える譲状(安芸一一二)が作成される。「匁子分」が「庶子分」の誤記であれば、山川氏は清遠氏の傍流であったと推察される。次章でみる山川氏が東川専当職を継承する以前にこれらの文書(安芸一〇一・九四・一一二)を保持したのであれば、これらは〈プレ山川文書〉として位置づけることができる。

四 〈山川文書〉の形成

応永年間の末に至り、東川専当職の内容に変化が生じる。

応永三十三年に、広瀬之定は「東河専当職東分」を清遠牛松丸殿に預け置く宛行状(安芸一二六)を発給する。これは、東川専当職が東西に分割され、清遠氏にその東分が宛行われたことを示す。同年には

(香宗我部カ) かうそかへ久松が書状(安芸一二五)を以って、「代々もんしよ九つう」を山川のうし松丸に渡す。この山川のうし松丸は清遠牛松丸と同一であろう。

その一方で、年末詳十一月晦日書状(安芸二二三・二一四・二一八)では、「東川西分専当職」が山川新左衛門(山川殿)に預け置かれる。これらの書状は、山川殿のほか大忍庄の現地で荘園経営に携わったとみられる入交氏と沙汰人中を宛所とする。山川新左衛門と山川のうし松丸(清遠牛松丸)との異同は確定し難い。

永享十一年(一四三九)には、東西併せた「東川専当職」が山川新左衛門の領有に帰した。

【史料4】(安芸一四〇)

申請「」

合伍貫文口

右件りせに「」

申請処実也、但月二百文二三文

つゝのりふん加候て、来十月中

沙汰可^レ申候、若無沙汰候ハ、清遠

名文書十六通お、しちに^④お

き申上ハ、彼文書以捧離

可^レ申候、若此文書不足候ハ、

東河^⑤せんたうしきの文書

お、此かわりに、しちおき申

へく候、仍後日為副状如^レ件、

永享十一年閏正月十八日

北村殿(東川^⑥まいる)

【史料5】（安芸一四一）

契やく申候東川専当職文書事

合伍十通者

右彼文書等者、東川専当新左

衛門、けやく申候上者、代料足八貫

文、而限二永代一うり渡所明白也、

然此文書のくわりをちこほ

候ハ、ほうく^{（反放）}と可^レ有者也、此上

者、修理子孫おひて、違乱申

ともから出来候ハ、不教人可^レ為

者也、仍為^二後日^一亀鏡之状如^レ件、

永享十一年壬正月廿五日 石丸修理（花押）

東川専当新左衛門殿

【史料6】（安芸二一九）

専当職之事、

山川新左衛門ニ

預候、相違なく

御渡可^レ有候、毎事

恐々謹言、

掃部助入道

^{（嘉吉二年（一四四二）カ）}
十二月廿三日 道栄（花押）

北村殿 進之候

まず【史料4】は「清遠名文書十六通」と「東河せんたうしきの文書」を所有する人物が、「清遠名文書十六通」を質として、北村殿に五貫文の借用を求めた申請状である。つぎに【史料5】は石丸修理が「東

川専当職文書」五十通を八貫文で東川専当新左衛門殿に売却した契約状である。前後の状況から、この東川専当新左衛門は山川新左衛門と同一とみられる。【史料5】の石丸修理は、【史料4】の発給者とともに、〈東川専当職文書〉を相伝した清遠氏に近い人物であろう。つぎに【史料6】は掃部助入道道栄なる者が専当職を山川新左衛門に預けたものである。宛所の北村殿は、【史料4】にも見えており、山川新左衛門に近い人物とみられる。なお【史料6】は、綱なる者が領主の仰せを受けて専当職を山河新左衛門殿に渡した嘉吉二年十二月七日書状（安芸一四七）と発給月日が近く、おそらく両文書は連動して発給されたものであろう。

ここで【史料4】【史料5】からは、「清遠名文書」十六通と「東川専当職文書」五十通とが分別して扱われていたことが判明する。史料文言との対応に齟齬があり、読者の混乱を惹き起こしかねないが、おおよそ本稿で〈清遠名文書〉としたものは前者に対応し、〈東川専当職文書〉から〈清遠名文書〉を除いたものが後者に対応するものであろう。

宝徳二年（一四五〇）には讓状（安芸一五五）により、専当新左衛門殿が清遠之藤左衛門より東川清遠の屋敷を獲得する。この清遠之藤左衛門は、応永二十二年の「宛状」（安芸一一一、前掲）にみる専当藤左衛門と同一であろう。

こうして山川新左衛門は、〈東川専当職文書〉と清遠の屋敷を獲得し、さらに周辺の名田を集積する。

【史料7】（安芸一四五）

^{（マヤ）}
大里庄東川正延名之内事

^{（借安）}
合一所卅代

右件之於二田地二一、専当、彼支証、
^{（買取）}
正延方よりかいとる間、支証之旨ニ

まかせて、専当新左衛門方へ

④ 当行処実也、仍為_二後日_一

下知状如_レ件、

嘉吉元年卯月廿八日

実親（花押）

専当新左衛門処へ

この【史料7】では、「支証」（権利文書）の買収が正延名内田地の宛行に先行している。字「借安」の田地三十代は、元徳二年の売券（安芸三一、前掲）にみる字「加治安」の田地三十代と一致するものである。よって、安芸三一も【史料7】の「支証」に含まれたと考えられる。この「支証」は〈正延名文書〉と位置付けることができる。

この山川新左衛門には武家被官人としての活動も認められる。宝徳二年十一月十五日には、先行研究で阿波細川氏の被官と理解される赤沢為盛が、坪付注文（安芸一五八）を添えて「清遠名内則三分一」を専当新左衛門に宛行う下知状（安芸一五七）を発給する。年末詳七月二十日の梶原資景書状（安芸二一〇）は、専当新左衛門尉が「清遠名三分一」を領有することを理運と認め、殊に専当が「去年於_二御陣_一致_二忠節_一」したことを賞している。さらに年末詳卯月十日の梶原資景書状（安芸二〇九）は、「彼仁於_二堺合戦_一、致_二忠節_一候」と述べる。詳細は不明ながら、山川新左衛門はこの頃堺で奮戦した模様である。年末詳五月十四日の久賢書状は、梶原資景に宛てたもの（安芸二一一）と土州大忍庄南北沙汰人百姓中に宛てたもの（安芸二一二）の二通がある。久賢がこれらの書状で、「理運」と認めた「専当望申子細等」とは、山川新左衛門による「清遠名三分一」の領有を指すであろう。宝徳二年四月二十九日の鍋女宛て渡辺中源左衛門尉書状（安芸一五六）は、清遠藤左衛門による清遠名への違乱を警戒しており、「清遠名三分一」の領有をめぐる競合のあったことが推察される。

しかし、このような山川新左衛門も、大忍庄にあつては専当としてあくまでも在地名主層の傍輩関係に半ば埋没した存在に過ぎなかった。

【史料8】（安芸一六三）

大忍庄西河・東河御百姓之契約状之事

合

一 公方御年貢諸公事、任_二先例_一可_二勤仕_一事
一 当知行在所、此中にて不_レ可_レ望事
一 他所_得契約仕候て、万地下不_レ可_レ有_二違乱_一事
一 何事も諸公事、此中にて可_レ有_二談合_一事
一 我人見捨、不_レ可_レ被_二見捨_一事
右背_二此五ヶ条_一者致_二ハ、傍輩儀不_レ可_レ有_二候_一、
仍為_二後日_一契約状如_レ件、

康正三年（丁丑）八月五日

西河分	東河分（公文判、専当判）		
専当判	重利判	別役判	末清判
延清判	光弘判	雑用判	清遠判
行宗判	雑用判	末延判	宗円判
国末判	末国判	福万判	清国判
国包判	正弘判	京慶判	恒光判
国久判	秋元判	為清判	国光判
包吉判	別役判	光国判	

この【史料8】は大忍庄の東西両川を構成する名主等が、互いに順守すべき事柄を定めた契約状である。康正三年は、後述する専当新左衛門尉の終見史料、文正元年常全・久長連署奉書（安芸一七一）の発給以前であるから、【史料8】の東河分専当は山川新左衛門に比定される。

それでは、【史料8】はいかなる契機で発給されたのであろうか。

寛正七年（一四六六）に東川専当殿へ送られた清遠名の料足請取状（安芸一七〇）には「則あわへ進上申候」と記されることなどから、「大忍庄は管領家の所領であつたが、室町末期までは阿波守護細川家が管理全般について管掌していた」こと、すなわち「管領家―阿波細川家―大忍庄代官」の支配系統が想定されている⁴⁷。基永なる者が大忍庄の沙汰人中に「出陣」を慫慂した奉書（安芸一六七）には「寛正三壬午八月四日到来候」との追筆がある。寛正三年は阿波守護細川成之を含む幕府軍が、河内国岳山城に拠る畠山義就を攻撃した年であり、大忍庄の領主である細川氏が、住民への負担を強化したことが想定される⁴⁸。

この頃、大忍庄の百姓等は、【史料8】の二年前に六か条にわたる安芸御政所殿宛ての申状（安芸二八十一・一六二）を作成しており、【史料8】の八年後には十三か条にわたる申状（安芸一六九）を作成している。これらの申状と【史料8】は、いずれも細川氏による大忍庄住民への負担強化に反対するため、名主層が作成したものと思われる⁴⁹。

本稿の趣旨に立ち返れば、以上の契約状・申状・奉書・請取状等は、名主層において中心的な役割を果たした東川専当の山川新左衛門を通じて残されたものと考えられる⁴⁰。

さて、山川新左衛門に比定できる人名の終見史料は、東川清遠名内下王子神田の兼光四郎次郎持分を専当新左衛門尉に宛行つた文正元年常全・久長連署奉書（安芸一七一）である。

この後、東川専当の存在を示す史料には、元網なる者が専当あねに宛てて「東川専当名」年貢・諸公事以下の弁済を催促した文明六年（一四七四）の催促状（安芸一七九）、「任「御奉書之旨」」て「東川専当名」の年貢米を定額の外は猶予した東川専当なべ女宛て文明八年書下（安芸一八三）、大忍庄の現地代官とみられる東政所当代佐竹宗義が清遠・末清両名田の相論を裁許して東川専当左兵衛尉殿にその知行を認めた文明

十八年下知状（安芸一九一）の三通がある。

まず、専当あねと東川専当なべ女の関係については、他の史料に所見がなく不明である。しかし、年末詳卯月二日書状（安芸一八五）と年末詳十一月二十四日書状（安芸一八六）を東政所佐竹宗吉へ送った通宗は、文明十一年六月五日にも東川専当職について「無「男子」」により「女相伝」を認める書状（安芸一八四）を発給しており、山川新左衛門に連なる女性が、専当職を継承した可能性は高く、専当あねや東川専当なべ女がその女性であつたことも想定できる。

他方の東川専当左兵衛尉も詳細は不明である。しかし清遠・末清両名田の相論を通じて、東川専当左兵衛尉が末清名に関する一連の文書（末清名文書）（安芸三六・三七・五六・五七・一二八・一四九・一五三）を入手したことは容易に想定できる。

本章では山川新左衛門から、専当あね、東川専当なべ女、東川専当左兵衛尉までの事績を取り上げた。〈東川専当職文書〉を獲得した山川新左衛門から東川専当左兵衛尉までの間に集積された文書を、ここでは〈山川文書〉と称したい。かつて横川末吉は「清遠名、専当職の文書は山川氏に伝えられたと思われる」と指摘したが、山川氏は〈清遠名文書〉や〈東川専当職文書〉のほか、〈正延名文書〉や〈末清名文書〉をも入手したと考えられる。

五 〈ブレ畑山文書〉の形成

現在の高知県安芸市に広がる安芸平野は、西に安芸川、東に伊尾木川が流れ、南に土佐湾を臨む地である。古代には『倭名類聚抄』にみる黒鳥郷・玉造郷・布師郷が存在し、中世には安芸庄（九条家領を経て京都槇尾西明寺領）として領有された。中世の安芸氏は、永禄十二年（一五六九）、長宗我部元親の安芸城攻撃により当主の安芸国虎が敗死するま

でこの地にあった在地領主である。この安芸氏滅亡後の長宗我部氏領国

時代に、安芸城下は、朝鮮出兵に備えた軍事拠点として都市化が進められた。⁽⁴⁴⁾現在の安芸市土居は、安芸城の故地とされ、安芸平野の西部には西浜八幡宮や安芸国虎の墓のある浄貞寺など、安芸氏ゆかりの寺社が連なる。⁽⁴⁵⁾

安芸川の最上流部、高知県安芸市畑山は、山地を隔てて西に大忍庄東川を臨む山間地域である。中世には在地の畑山氏によって支配され、明治の廃仏毀釈までは当地に畑山氏の菩提寺田岸寺が存在した。⁽⁴⁶⁾

中世の大忍庄東川では、〈専当職并国弘名文書〉↓〈清遠名文書〉↓〈東川専当職文書〉↓〈山川文書〉と段階的に文書が集積されたが、畑山氏のもとでもこれと同時に並行的に、後に「安芸文書」の構成要素となる文書が集積された。いまこの文書の集積を〈プレ畑山文書〉と称して、後述する〈山川文書〉を包摂した後の〈畑山文書〉と区別する。

次の史料は、畑山氏が安芸氏から分出したことを示すとされる史料である。

【史料9】（安芸一三）

（前欠）

一所」

一所壹段下地共二反秀郷免」

（中略）

一ハタ山屋敷」

（中略）

一所壹段其条十一日屋敷

山野河海ハ非「制限」事

右任「和与之状旨」、对「舍弟五郎左衛門尉」^(康カ)

信「之处、坪付如」件、

正応元年八月「

」（花押）

この【史料9】の傍証となる史料には、近世に作製された系図や由緒があるのみで一次史料はない。吉田萬作は、これらを比較検討して、【史料9】の記述に信を置き、安芸実信の子知信が安芸氏を継承して、その弟康信が畑山の地に封ぜられたことを推定する。⁽⁴⁷⁾その一方、横川末吉は「右文書が畑山名の田畑屋敷を示すものかどうかは、何分に地名が欠けているので十分明らかでない」と留保する。⁽⁴⁸⁾

「安芸文書」では、【史料9】より百年余りを経て、応永年間から享徳年間の文書の宛所に、はた山兵衛左衛門が現れる。

すなわち、谷の御まいがはたやまさへもんと、から金銭を貸借したとみられる応永二十四年の証状（安芸一一五）、秀正がはた山のひやうへさへもん殿から十貫文を借りた応永二十五年の借用状（安芸一八）、国重三郎多もんが幡山兵衛衛門とのから五百文を借りた永享七年の借用状（安芸一三三）、某が親の負物弁済のために田地一反四十代をはたやま口兵衛門殿に預けた同年の契約状（安芸一三四）、木左衛門がはた山のひやうへさへもん殿から二貫文を借りた永享九年の借用状（安芸一三七）、丸山が「せんとのもんそ」と札銭十貫五百文を差し出すことをはた山へ送った宝徳二年の証状（安芸一五四）、三本が「うしやうたち」に関してひやう多さいもんとへ送った享徳四年の証状（安芸一六〇）、乙法師をはた山殿の下人とする享徳四年の「身ひき文」【史料10】、岩神三郎左衛門沙弥浄印が東河山頭ハタ山殿へ宛てた寛正武年の売券（安芸一六六）、山当又九郎が御山使に關してはた山次郎とのへ送った寛正五年の証状（安芸一六八）、和食某がはた山兵へさへもん殿へ宛てた年末詳十二月九日付書状（安芸二二一）等である。いずれも宛所より、〈プレ畑山文書〉と位置付けることができる。

前章に見た〈山川文書〉では名田畠の権利文書が多くを占めたのに対

し、〈プレ畑山文書〉では金銭の貸借文書が多い。その背景には、大忍庄東川においては複数の名主が併存し、畑山においては畑山氏に比肩する村落領主が存在しなかったという、地域社会の質的相違を指摘できる。この〈プレ畑山文書〉では、下人に関する文書が散見する。

【史料10】（安芸一六一）

人かとい申たる二よんで、みおひき
申候所実也、字おと法師と申候おとこ、
年をかす二よんで、年かゝす候、永代おかきり候て、
は田山殿所多、身をひき申候所実也、いか
なるけんもんかうけの御りやう内、神社仏
事御りう内二候とも、この状文おもん
て、御さた候はん時、一口之委細申すましく候、
御さたあるへく候、依後日為、身ひき文
状如件、

名母地藏

（四五五）
享徳四等八月十八日 乙法師（花押）
名谷

石井進は【史料10】とともに、伴平内が「安芸庄八多山^{（畑山）}於宮地」で犯した「大犯之罪科」により「死罪」に及ぼしたところ、僧侶の口入で助命され、以後子々孫々田山東殿の下人となることを誓約した元応元年の身曳状（安芸二六）を紹介し、これらの身曳状が領主畑山氏の側で作成されたことを推測する。⁵⁰

先行研究では、畑山氏によるこれらの土豪的な活動の背景に、山林資源の中央市場への売却による貨幣の獲得が指摘されている。⁵¹その根拠として挙げられるのが、三郎衛門がはた山殿へ宛てた材木運搬に関する永

正七年（一五一〇）の覚書（安芸二〇一）、さかいしん^{（堺新庄）}しやう二郎さへもんがはたやま二郎三郎殿に材木を誂えた年未詳覚書（安芸二三五）、文亀三年（一五〇三）の伊勢参宮の料足に「丸柱の代」を充てた旨が記される三郎左衛門からはた山殿への永正十三年の覚書（安芸二〇二）等である。本稿の趣旨に立ち返れば、これらの文書はいずれも〈プレ畑山文書〉として位置づけられる。

文明年間から永正年間の文書には、八多山^{（畑山）}藤左衛門尉が現れる。八多山藤左衛門の初見史料は、文明八年六月十一日に安芸元盛が八多山藤左衛門尉殿に「安芸山中」のうち畑山氏が知行する領域を安堵した文書（安芸一八二）である。安芸元盛は、近世の安芸氏系図諸本にも認められ、ひとまず実在した人物と解しておく。文明十六年には、八多山藤左衛門尉が「若上様」から二貫文の扶持を下されたことを示す文書（安芸一八七）を作成する。

寺尾正則が八多山殿に宛てた文亀三年十二月十七日書状（安芸一九八）と、発給者不詳で八多山殿に宛てた年未詳十二月十七日書状（安芸二二一）は、ともに安芸庄の西に位置する夜須庄（現在の高知県香南市夜須町の一帯）の灯油田三反について述べたものである。ここで八多山殿は、ある人物から夜須庄の争乱に対する「粉骨」「忠節」が期待されている。寺尾正則は文明十六年七月にも「吉久散田数」の記録（安芸一八八）を作成しているが、これと筆跡の相違する同年九月の「吉久散分田数」の記録（安芸一八九）の二通は、右の安芸一九八や安芸二三一と「かたまり」を成して八多山藤左衛門の手に渡り、〈プレ畑山文書〉に伝えられたのではないだろうか。

六 〈畑山文書〉の形成

戦国時代に至り大忍庄は、東の安芸氏と西の山田氏（現在の高知県香

美市土佐山田町楠目にあった楠目城に拠る一族の抗争の境界地帯となる。次はそのことを示す「行宗文書」中の一史料である。

【史料11】⁽³²⁾

大忍西河行宗名之支証之事、山田・大里御取相之時、行宗被官田中之治部、東河専当殿公事人中屋所江預申処ニ、中屋方此支証

山河殿城へあけ申候処、専当殿御支証相そへられ候て、安芸畑山へ御あつけ候間、弓矢無事、以兩年私之

母にて候者、樽さつしやう持せ進^レ之候処ニ、畑山より御取よせなく候とて、未^ニ取^下候条、于^レ今専当殿ニ御座候哉、雖^レ然世上之不定之折節にて候間、自然何方ニ候共、行宗惣領より、代々副狀なく候ハ、本支証成共、ほうくたるへく候、已後日之為^ニ沙汰^一之ニ、支証として一筆如^レ此申合候、

永正八年^(五二)〈辛未〉九月吉日 行宗兵衛左衛門尉

ゆつり状

(花押)

彦左衛門とのへまいる

この【史料11】は、永正八年に大忍庄西川行宗名主の兵衛左衛門尉が「大忍西河行宗名之支証」の所在を記録したものである。「山田・大里御取相之時」は、行宗兵衛左衛門尉が自身の体験として回顧していることから、十五世紀末から十六世紀初頭の出来事とみられる。

【史料11】によると、行宗氏は被官の田中之治部を使者として「大忍西河行宗名之支証」を東川専当の「公事人」中屋へ預けさせたところ、中屋がこれを山川氏の城に預けた。すると山川氏は、これに「専当殿御支証」を添えて畑山氏へ預けた。その際、おそらくは山川氏の文書も畑山氏へ預けられたのであろう。後に戦乱の気配が静まり「母にて候者」を使者として畑山氏のもとへ遣わしたものの、「大忍西河行宗名之支証」は未だに返却されておらず、今に至るまで東川専当がこれ所持している

かと記される。⁽³³⁾

このように、大忍庄の名主層が持つ文書が畑山氏のもとへ預けられた背景として、次の【史料12】から、畑山氏が安芸氏と大忍庄の名主層との間を取り持つ仲介者であったことを指摘できる。

【史料12】⁽³⁴⁾

其後ハ何事共候哉、床敷候、仍いろく^(推説)そうせつ共候、かたく^(小補)申あわせ候事、国ニかくれなき事よく^(似合)引たてにあつかり候ハ、にあひの奉公いたし申へく候、たのミ入候、次くちらこおけ^(夜須)ニ入進之候、一つニ候へくし候、しやうくわんあるへく候、近日やすへこし候はん間、見参をこしまたく^(談合)八多山とたんこう候て、こころつかい憑入候、謹言、

十一月廿日 恒光新左衛門尉殿
あき元親^(安芸)(花押)

宗武源四郎殿

光国弥三郎殿

宗円八郎左衛門尉殿

大野殿 進上

この【史料12】では、安芸元親が恒光名主等に相應の奉公を申し入れ、畑山氏と相談して事に処すよう依頼している。安芸氏は山田氏との抗争、後には長宗我部氏との抗争を有利に進めるために、彼ら大忍庄の名主層を懐柔しておく必要があった。先行研究では安芸氏と畑山氏が本家・分家関係にあったことに疑義を呈する見解もあるが、⁽³⁵⁾少なくとも両者が政治的に密接な関係にあったことは明らかである。⁽³⁶⁾

第四章では、【史料4】【史料5】より、〈東川専当職文書〉が〈山川文書〉に包摂されたことを論じた。しかし【史料11】からは、当時、山

川氏とは別に東川専当の存在したことが看取される。先に文明十八年の下知状（安芸一九一、前掲）にみる東川専当左兵衛尉が〈山川文書〉を継承したことを想定したが、東川専当左兵衛尉の段階で、東川専当職が山川氏を離れて別の一族に相伝された可能性（東川専当左兵衛尉が山川氏でない可能性）もあり、その場合、〈山川文書〉とは別に「専当殿御支証」が形成されていたことになる。しかし、東川専当に関する史料が乏しいため、その詳細は不明とせざるを得ない。

ともかく【史料11】において、山川氏の文書が畑山氏へ預けられたことが確かめられた。ここに〈山川文書〉は〈ブレ畑山文書〉に包摂されて、新たに〈畑山文書〉が形成されたと考えられる。なお、すでに指摘されているように、暦応四年の西念讓状（安芸四六）は、「行宗文書」にある元徳四年と暦応四年の計四通の西念讓状と作成者を同じくする。^{⑤⑥}

安芸四六は、【史料11】の後に返却された「行宗文書」から脱落して「安芸文書」に残された文書であろう。本稿ではこれを「安芸文書」に含まれる〈行宗文書〉と位置付ける。^{⑤⑦}

さて【史料11】からは、畑山氏が山川氏をはじめとする大忍庄の名主層から、文書の疎開先として期待されたことが確かめられた。このほか、次の【史料13】【史料14】からは、畑山氏が山川氏の動向について、大忍庄の代官とみられる人物と連絡したことがわかる。

【史料13】（安芸二二八）

就^二東川専当事^一、兩度
申承候、本望至候、入道物
□り百足送給候、祝着至候、
是も祝儀計、厚帋數十帖・
目結一端進入候、委細事者、
此使ニ申入候、返々左衛門佐

事、自^三御喝食^一、御注進可^レ
有^レ之由、被^レ仰候つる、今日までハ
□され候ハす候、あき殿様^{（安芸）}
被^レ申候て、此事一かと了簡
候ハてハ、あまりくくちおしき
趣にて候哉、能々可^レ被^レ仰□候、
留守にて候共、自然何事も
候ハ、大野方へ可^レ被^レ付候、
恐々謹言、

三月十八日 常悦（花押）
畑山殿御返事

【史料14】（安芸二二三）

態僧越候、就^レ其東川専当
父子とも被^レ打事、ふひん中く不^レ
及^二是非^一候、とりわけ左衛門二郎^レ
「か事、我ら使者」
ふひん無^二申計^一、廳而僧可^レ越
処ニ、是□一□訪候間、于^レ今
延引候、「^一」心中推量□、
子細此僧可^レ申候、
恐々謹言、
三月十九日 弘繁（花押）
はた山殿

この【史料14】は、東川専当父子すなわち当時の山川新左衛門父子が討たれたことを不憫であると、弘繁がはた山殿に伝えた書状である。弘

繁ははた山口殿宛ての、ある文書の包紙（安芸二九八）において「龍宝寺弘繁」とみえる。ほか「安芸文書」において「龍法寺」が現れる文書は次の通りである。

（1）文正元年（一二四六）十二月二日常全・久長連署（安芸一七一、前掲）：専当新左衛門尉の終見史料。宛所の「龍宝寺侍者御中」に、領主の「仰」を在地に下知するよう求める。

（2）文明四年（一二四七）三月二十三日通宗書状（安芸一七五）：宛所の斎藤河内入道殿に、「龍宝寺様」の仰せられる子細につき、「二跡等之事」は「召^二出親類^一」て申しつけるようにとの領主の「仰」を伝える。前欠。

（3）年末詳六月二十七日某書状（安芸二三〇）：宛所の「南北御政所龍宝寺侍者御中」に、「東別役申間事」についてはその無為の成敗を賞し、委細については「和食方へ」尋ね、「南北之儀」については「毎度厳密之御下知」あるよう命じる。

（4）年末詳十月三日常全・久長連署書状（安芸二二五）：宛所の「龍^{（宝寺）}寺侍者御中」に、「大里^{（大里）}庄南北きらい名数之事」について「能々南北百姓中」に仰せ付けるよう命じる。

（5）年末詳六月二十一日書状（安芸二三三）：東川百姓中の横山専当道光・西川専当・別役道祐・恒光宗源らが、宛所の「了宝寺御^{（西堂）}せひとう」に発給したもの。前欠。宛所の「了」字は『地方史料』に則り、ひとまず「龍」の誤記と解しておく。

以上より、龍宝寺は領主と住民の間に立つ代官的な立場にあったことが分かる。吉田萬作は、年月日未詳某文書（安芸二八二）の「兼又清遠事、又沙汰人百性との公事も、毎事西堂さまの御計たるべく候、いか様の公事もそせうも、西堂の成敗にてあるべく候」にみる「西堂」を、^{（西堂）}（5）より龍宝寺を指すものと理解する。

大忍庄の政所については、文明十八年三月二十日の下知状（安芸一九

一、前掲）に東政所当代佐竹九郎左衛門尉宗義とみえ、延徳二年（一四九〇）の舞河名下知状に「東佐竹吉宗、西備後守之保」と見えることから、^{（前掲）}十五世紀末期以降のある時点において、東西政所から南北政所への転換が起り、龍法寺が南北政所の機能を持ったことが想定される。

（3）（4）は南北政所時期のものといえよう。

次に【史料14】に記される東川専当が討たれた時期を検討する。

横川末吉は、永正四年に「細川氏の残存勢力」が土佐国から撤退したこと、永正六年に「土佐における真の戦国期の開始」となる長宗我部兼序の敗死があったこと、大永六年（一五二六）に香宗我部氏が安芸氏より大打撃を受けたことなどを以って、東川専当父子の死去を戦乱による「討死」と捉え、これを永正年間末期あるいは長宗我部氏による大忍庄計略があった天文二十年頃と推測する。^{（前掲）}この大忍庄をめぐる政治情勢に即した横川説は、〈畑山文書〉の成立時期を示す【史料11】以後、東川専当が「安芸文書」に現れないという文書内容の时期的な段階差に対応する。例えば【史料11】にみる「大里御取相」のような戦乱で、東川専当父子が「討死」したことは容易に想定できる。しかし、傍証する史料に乏しく、推測の域を出ない。

これに対して吉田萬作は、①山川新左衛門の専当職獲得の過程では在地社会で「相当の無理」が行われ、「怨念」を募らせた「被害者たち」が山川新左衛門の殺害に及んだと「想像」されること、②「この時期」に「莊官」龍宝寺の文書が集中すること、③文明八年の書下（安芸一八三、前掲）によるなべ女の専当職継承が「男系専当職後継者」の喪失を受けたものと考えられることなどを以って、東川専当父子の死去を山川新左衛門父子が蒙った「殺害事件」と捉え、これを文明六年の催促状（安芸一七九、前掲）にみる専当あねの補任以前と推測し、横川の推測より時期を遡らせる。^{（前掲）}この吉田説では、文明十一年の通宗書状（安芸一八四、前掲）にみる東川専当職の継承者に「無^二男子^一」状況を、なべ

女の継承によって説明できる（「男系」ではなく「男子」後継者といふべきか）。しかし、①についてはやや「想像」を逞しくした感があり、山川氏が畑山氏の経済力を後ろ盾にしたとの想定も裏付けに欠ける。

これらを踏まえて、本稿筆者は（2）に注目する。宛所の斎藤氏是不明であるが、内容は明らかに家督相続に関するものである。発給年月日も専当新左衛門尉の終見史料（1）と専当あねの出現史料（安芸一七九、前掲）との間にあり、内容上の連関が想定される。また（2）は【史料14】と発給月日が近く、両者が連動して発給されたことを推測させる。山川新左衛門が武家被官人として活動したことも踏まえるならば、その死を戦乱による「討死」と想定することも許されよう。

以上より、本稿筆者は吉田説とは別の根拠を以って、文明六年における専当あねの東川専当補任の直前に【史料14】が発給されたこと（東川専当父子が討死したこと）を推定し、【史料13】【史料14】を（プレ畑山文書）と位置付けるものである。

ところで、先に東政所佐竹九郎左衛門尉宗吉を宛所とする二通の通宗書状（安芸一八五・一八六、前掲）と南北政所の龍宝寺を宛所とする三通の文書（二三〇・二二五・二三三）を示した。これらのいわば〈政所関係文書〉が正文であった場合、【史料11】で山川氏の文書が畑山氏へ預けられたように、〈政所関係文書〉もまた畑山氏へ預けられたものと推測できる。東西政所から南北政所への転換をみても、現地支配の流動性が看取され、その文書保管機能も脆弱なものであったと想定される。

本章をむすぶに当り、【史料11】の前後に発給された二つの文書を確認する。

【史料15】（安芸一九〇）

御契約「」

一 弥高御代之ことく、御契約状

拝領、畏入候事、

一 身上相応之儀、蒙_レ仰可_レ致_二奉公_一事、

一 任_二先例之旨_一、可_レ仰_二御扶持指南_一事、

仍為_二後日_一状如_レ件、若此旨偽

儀候ハ、日本国大小神祇別

御伊勢「」并八幡大菩薩

可_レ蒙_二御罰_一者也

八多山藤左衛門尉

文明十六年九月廿日「」

山田新介殿

【史料16】（安芸二〇三）

申合契約状之事

一 倅家虎寿丸守之事

一 大小事可_二申談_一事

一 雑説讒言候共、互糺明可_レ申事

右背_二此旨_一候者、

伊勢天照大神宮・熊野三所

当国之鎮守一宮大明神之

可_レ蒙_二御罰_一者也、

永正拾四年（丁丑）九月吉日

山田彦左衛門尉

道賢（花押）

八多山藤左衛門尉殿まいる

まず【史料15】は、八多山藤左衛門尉が山田新介殿に服属を誓うかのような内容の契約状である。【史料15】は、山田新介を宛所としながらも、案文として（プレ畑山文書）に残されたものであろう。つぎに【史料16】は、山田道賢が八多山藤左衛門尉殿に、倅虎寿丸の後見と対等な

立場での協力を求めた契約状である。【史料15】の山田新介は他の史料に徴し得ないが、ひとまず楠目城に拠る山田氏あるいはその縁者と解しておく。この場合、二つの史料の間で、両者の関係に変化のあったことが分かる。【史料11】の「山田・大里御取相」における山田氏側の劣勢を読み取れよう。

楠目城に拠る山田氏は、天文十八年（一五四九）の秋までに、長宗我部国親によって滅ぼされたと理解されており、その後から土佐国東部の政治情勢は、安芸氏と長宗我部氏による抗争へと変化する⁽⁶⁹⁾。

七 「安芸文書」の形成

前章では〈山川文書〉が〈ブレ畑山文書〉に包摂されて、新たに〈畑山文書〉が形成されたことを論じた。〈畑山文書〉から「安芸文書」に至る経過を明らかにするために、まずは安芸氏の滅亡について確認する。

永禄十二年八月の長曾我部元親の攻撃による安芸氏の滅亡を示す一次史料はない。「安芸文書」では、近世安喜氏の由緒や系図（安芸二四一・二四五〜二四八・二五〇）、安芸氏菩提寺浄貞寺の縁起（安芸二五一・二五二）が安芸氏の滅亡に触れるが、いずれも近世に作製されたものである。吉田萬作はこれらの他にも、近世に執筆・編纂された「安芸系図」⁽⁷⁰⁾「安芸家相承深秘録」⁽⁷¹⁾「安芸家譜略抄」⁽⁷²⁾「安芸氏浄貞寺位牌写」⁽⁷³⁾「安芸元経覚書抜書」⁽⁷⁴⁾「安喜家史料」等の安芸氏に伝わる史料を挙げ、これを「安芸家古文書」と総称する。これ以外では、近世の軍記『元親一代記』⁽⁷⁵⁾「長元記」が安芸氏の滅亡に言及する。

これらの史料によると、永禄十二年八月十一日に安芸国虎が浄貞寺で自害した後、その子息千寿丸は家臣と共に阿波国へ落ちのび、彼の地で矢野備後なる者の聳となるも、天正十七年八月に三好氏対長宗我部氏の合戦で討死する。千寿丸に従った安芸氏家臣のうち、生き延びた畑山内

蔵尉と畑山元康は、長宗我部元親に許されて土佐に帰国するも、内蔵尉は天正十七年八月九日に安芸城で切腹を迫られ、他方の元康は畑山の地に落ち着き、以後その一族は、断絶した安芸氏の名跡を継ぎ、長宗我部氏の施策によって安喜氏を称した。前章までに論じた〈畑山文書〉は畑山元康からその子孫へと継承され、後に「安芸文書」として残されたものである。ここで「安芸文書」を、元康以後の近世安喜氏によって継承され、明治二十一年に重野安繹の採訪を受けた文書と再定義し、〈畑山文書〉までの前段階と区別する。

安芸国虎の自害前後に発給された一次史料には、永禄十二年七月に国虎が安芸郡内の長崎・井町・宗次の諸氏に発給した感状と、永禄十三年と翌元亀二年に千寿丸が配下の武士に発給した安堵状や感状がある【表】。これらはいずれも受給者側に伝来したものである。このほか、「安芸文書」に伝来する天正十六年九月十三日の畑山蔵尉起請文（安芸二〇六、【図2】206-2）⁽⁷⁶⁾がある。自今以後「御当家」に対し「悪心」無きことを誓ったその内容は、明らかに長宗我部氏へ差し出されたものとみえ、この安芸二〇六は案文として伝来したものと言えよう。

つぎに畑山内蔵尉等が千寿丸を擁して阿波国へ逃れて後、畑山元康が土佐に帰還するまでの〈畑山文書〉の保管について確認する。これについては、吉田萬作の研究がある⁽⁷⁷⁾。

吉田は、A「古証文唐櫃ニ入ル、此櫃古来ヨリ納メ在之、（中略）右墨付ハ安芸落城ノ節、長宗我部手ヨリ家臣有光市之進・中山刑部進城物ヲ改ム、其時此品者無用ノ品也トテ、西浜ノ多門院本尊毘沙門堂ニ入置也、其後並川四郎兵衛ト云モノ取出シ中尾ト云処ノ宮ニ納置、以後当家ニ帰り永久ノ家脈ヲ祝ス云云」（『相承深秘抄』）と、B「其後天正十七年八月九日ニ安芸番頭岩神神左右衛門進方へたばかり申候由、内蔵尉父子ニ終切腹被仰付候、其刻有光市ノ進・中山田兵部進・竹崎奎左衛門以上三人家財相改、私家ノ証跡ハ別ニ入申ものに無之と申、安喜多門院ニ

捨置御座候処ニ、奈比賀三郎兵衛と申もの取参、中尾ノ宮ニ籠候テ御座候を、近年取寄申所ニ云云」(『安芸家史料』式、安喜次左衛門申上)の二説を紹介し、「安芸文書」に畑山氏関連文書が多数を占めることなどから、「安芸文書」が安芸城内にあったとするA説を退けて、「安芸文書」が畑山内蔵尉の自宅にあったとするB説を採る。

本稿筆者はA・B両説ともに表れる多門院と中尾の宮の位置を比定し得ておらず、また両説の傍証となる史料も徴していない。とはいえ、「安芸文書」の主要文書が〈畑山文書〉であることを踏まえ、A説は退けておきたい。

さて、後述するように現在「安芸文書」の原本は失われており、その内容は、冒頭で紹介した影写本からしか知り得ない。

このうち安芸二〇四〜二〇六は近世に作製された写である。これらの原本は【表】の通り、「魚梁瀬村五左衛門蔵」(山本家文書)として見出されている。この三通の写が「安芸文書」に残された理由に関して、吉田萬作は『安芸家譜略抄』に、「[方印] 安芸千寿丸御判形也、角田与惣左衛門へ之感状ニ有^レ之、安芸儀兵衛知信写来ル、右写シ古証文ノ入タル箱ノ内ニ有^レ」の記述を指摘している。^⑧同様に、【史料3】は元文六年(二七四二)に清遠源右衛門が「在来の古キ証文」のうち一通を取り出して、安喜氏当主惣十郎へ持参して写し置かれたものであることが、【史料3】の奥書に記されている。

このように近世の安喜氏は、他家に残された安芸氏関連文書を筆写してこれを〈畑山文書〉と混在させて、「安芸文書」を形成したのである。^⑨その他、「安芸文書」には伝来経緯の不明な文書の「かさなり」がある。

まず、「内宮社」「深淵社」「鹿苑寺」等に関する八通の文書〈深淵社文書〉(安芸六・一五・二一・二九・八〇・八四・八五・一七八)がある。「深淵社」は現在の高知県香南市にある深淵神社とみられるが、同

社は畑山の地から離れた香長平野の中心にある。さらに『土佐国蠹簡集』では、〈深淵社文書〉の一つ安芸八〇と同文同年月日の文書が「安喜郡浮津民間蔵」として採録されている。^⑩これは現在の高知県室戸市浮津の地で住民が共同で管理した文書とみられるが、浮津における伝来も、現時点では不明というほかない。また、明徳二年八月十六日に法橋重成が鹿苑寺住房屋敷を子息重宗に与えた譲状(安芸八五)は、『土佐国蠹簡集拾遺』に「夜須村庄屋小松文五郎蔵」として採録される同年月日の法橋重成譲状と内容が連関する。近世の『安芸家譜略抄』では、〈深淵社文書〉にみる寺社について概略がまとめられているが、このことは、近世にこれらの文書が所与のものとして受け止められていたことを示しており、〈深淵社文書〉が中世までの〈畑山文書〉に含まれていたことを推測させる。

つぎに、^⑪韮生郷の清爪名^{せいづめな}に関する七通の文書〈清爪名文書〉(安芸一八・二八・一九三〜一九五・二六二・二六三)がある。中世の清爪名は、近世の清爪村、現在の高知県香美市香北町清爪に比定される。当地は「柳瀬文書」(『地方史料』収載)等の残された大忍庄楨山に近く、畑山からは遠い。ただし、畑山―東川間の直線距離と畑山―清爪間の直線距離は同じ程度であり、〈清爪名文書〉もあるいは〈山川文書〉などと同じく、戦乱を避けて畑山の地にもたらされたものであるかも知れない。

このほか「安芸文書」には、右の二例と同じく畑山の地から離れた現在の高知県奈半利町の土地に関する文書(安芸一九〜二二・一四八)や国末名に関する一連の文書〈国末名文書〉(安芸二四・三〇・三八・四一・五四・五九・六〇・六二〜六五・一二二・一二三)など、伝来系統の不明な文書が多くある。これらの文書の伝来は、中世の畑山氏や安芸氏の勢力圏、また山間地域における人々の交流のあり方に関わる問題であり、今後の究明が俟たれる。

このように様々な文書の「かさなり」を包摂して成立した「安芸文

書」は、文書散逸の幾多の危機を乗り越えながらも、昭和二十年（一九四五）当時保管されていた徳島市において米軍の空襲に遭い焼失する。⁽⁸³⁾

むすびに

本稿で復元した文書の「かさなり」とその包摂過程・包摂関係を【図1・2】で示した。しかし、「かさなり」を復元し得なかった中世文書も全体の三分の一近くに上るなど、なお検討の余地を残す結果となった。本稿は、先行研究の整理に終始したが、「安芸文書」の成立と構造に焦点を据えた論稿として、意義あるものと考えている。

さて、本稿筆者は浅学にして、伝来系統を異にする文書の「かさなり」をもつ家文書の実例を、禁裏領丹波国山国庄の「井本家文書」、肥前国の「青方文書」、薩摩国の「比志島家文書」の三例を挙げることにできない。「井本家文書」には同地の塩野垣内の開発を主導した鶴野氏の土地証文が含まれており、⁽⁸⁴⁾「青方文書」には「青方氏と白魚氏という個々の家に集積した二つの文書群」が混在しており、⁽⁸⁵⁾「比志島家文書」には比志島氏と同族関係にあった上原氏を宛所とする文書が残されている。⁽⁸⁶⁾

こうしてみると、伝来系統を異にする文書の「かさなり」を幾重にも包摂する「安芸文書」は決して特殊な家文書でないことが了解されると思う。文書群の構成が、当該地域社会の政治的・社会的・地理的諸環境と密接に関わることは縷言するまでもない。

大忍庄に関して言えば、名主層が水平的な傍輩関係にあったこと、恐らくは全荘園領域的な祭祀の拠点と組織を欠いたこと、⁽⁸⁷⁾長宗我部氏の出現まで地域社会を押さえる強力な上級権力が存在しなかったこと、個別の集落が山地によって隔てられることなど、いくつかの地域的特質を指摘できる。下人史料の多さから窺える住民の社会的流動性も、見逃すこ

とはできない。こうした地域的特質は、名主層が名主身分を保持する上での文書に対する独特な権利意識を規定したものである。文書の移動や管理に関する史料、あるいは文書がもつ証拠能力を主張する史料が見出されることは、その端的な表れといえるのではない。地域比較の点からは、祭祀形態の相違を除いて、近江国甲賀郡中惣や伊勢国小倭郷との同質性が想定される。いずれも大忍庄の全国的な位置付けに関わる問題であり、他日の検討課題としてひとまず擱筆する。

※注：副題は省略した。

注

- (1) 高知県編『高知県史古代中世史料編』（一九七七年）に『土佐国蠶簡集』・『土佐国蠶簡集拾遺』・『土佐国蠶簡集木屑』・『土佐国蠶簡集竹頭』・『土佐国蠶簡集脱漏』・『土佐国古文叢』が収載される。以下ではそれぞれ、蠶・拾・木・竹・脱・古と略し、引用にあたっては、『高知県史古代中世資料編』での文書番号を示す（例、蠶五〇）。
- (2) 近世村落研究会編、日本学術振興会。
- (3) 山本・秋澤「長宗我部権力の前提基盤」（山本大『土佐中世史の研究』高知市立市民図書館、一九六七年、初出一九五六年）。
- (4) 横川「行宗文書の研究」（『土佐史談』九〇、一九五七年）、『大忍庄の研究』（高知市立市民図書館、一九五九年）。
- (5) 正木「荘園解体期に於ける土佐国大忍庄の在地構造の変化について」（『日本歴史』一四三、一九六〇年）。
- (6) 黒川「土佐国大忍庄の専当について」（『中世惣村の諸問題』（国書刊行会、一九八二年、初出一九六九年）、のち秋澤繁編『戦国大名論集15長宗我部氏の研究』（吉川弘文館、一九八六年）収載）。
- (7) 神木「中世山間庄園における在地構造」（『国民経済雑誌』一二三（四）、一九七一年）、「中世山間庄園における貨幣」（『国民経済雑誌』一二七（一）、一九七三年）。
- (8) 湯山「土佐国大忍庄と鎌倉極楽寺」（『鎌倉』三三、一九八〇年）。
- (9) 吉田「安芸家古文書の由来顛末と史実齟齬の諸問題」（安芸市史編纂

- 委員会編『安芸市史 歴史篇』一九八〇年）、『香我美町史 上巻』（香我美町史編纂委員会編、一九八五年）、「大忍庄支配経過の一考察（上・中・下）」（『土佐史談』一九二・一九三・一九五、一九九三年、一九九四年）。
- (10) 甲藤「室町戦国初期、土佐大忍庄の在地構造」（『瀬戸内海地域史研究』二、一九八九年）。
- (11) 福岡「極楽寺領大忍庄の成立時期について」・「文保二年文書の『ありすかわとの御代』について」（『土佐史談』一九八・一九九、一九九五年）。
- (12) 秋澤「大忍庄」（網野善彦ほか編『講座日本荘園史10 四国・九州地方の荘園付録索引』吉川弘文館、二〇〇五年）。
- (13) 秋澤「土佐の山村」（網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 第六巻 内海を躍動する海の民』新人物往来社、一九九五年）。
- (14) 米家「中世山村の境界と山地地形」（『中・近世山村の景観と構造』（校倉書房、二〇〇二年、初出一九九六年）。
- (15) 楠瀬「柳瀬名と行宗名の開発」（中世地下文書研究会報告資料、二〇一九年三月九日）、「大忍庄・葦生郷・山田郷故地調査報告 山北前田行宗 福万 柳瀬」（奥四万十山の暮らし調査団編『地域資料叢書 21 土佐中東部の荘園故地を歩く——第1分冊』二〇二二年）。
- (16) 「安芸文書」は家文書である限り、本来「安芸家文書」などと称すべきであるが、本稿では大忍庄研究史上の慣例に則り、「安芸文書」と称する。また本稿の表題では、大忍庄「安芸文書」としたが、文書群の内容から、このように称することは許されると思う。
- (17) 横川注4書（一九五九年）、二六頁。
- (18) 例えば、下村効「戦国・織豊期、土佐国の伊勢参宮」（『戦国・織豊期の社会と文化』（吉川弘文館、一九八二年、初出一九八二年））にみる「鎌倉末期より戦国時代にかけてこの畑山氏は、安芸荘内畑山とともに、その西隣大忍庄の下級荘官（東川専当）として勢力を張っており」との記述がそれである。
- (19) 上島『中世アーカイブズ学序説』（思文閣出版、二〇一五年）、「新しい中世古文書学——総論編」（清文堂出版、二〇一八年）。
- (20) 『地方史料』では、安芸二〇六に重複がある。【図2】とは206(1)、206(2)と示した。また、安芸一四二と一四三の間には、掲載漏れの文書が一通ある。次に影写本を以ってこれを翻刻する。
- 奉行事
道重
- 永享十一年二月九日
- 次（花押）
- (21) 『史料種別』影写本、（請求記号）3071842、（書名）安芸文書。東京大学史料編纂所ウェブサイト公開される。
- (22) 黒川注6論稿。
- (23) 【史料5】。
- (24) 安芸一七一。
- (25) 『地方史料』「香我我部家伝証文」一一。
- (26) 『地方史料』「村上文書」一。
- (27) 湯山注8論稿。
- (28) 山本・秋澤注3論稿は、萩原殿について、永享十年に宗浄から広瀬鶴若殿に送られた書下（木九八・古三九二、夜須村小松文五郎蔵）にみる「大里庄（山南夜須川）□慶名夫役以下事、萩原及「違乱」云々、更以無レ謂之由候間、地下以「連判」歎申上者、早可レ被レ止「彼綺」の記述を以って、「大忍庄南部において荘園領主へ反抗を企て、地下に支配権を確立せんとしつつ、新しい領主制形成への動きをしめす在地における有力な荘官級」と評価する。
- (29) 横川注4書（一九五九年）二七―二八頁、高知県編『高知県史 古代中世編』（一九七一年）山本大執筆五七八―五七九頁、吉田注9書（香我美町史、一九八五年）一七二頁等。
- (30) 竈四七（香美郡山北村善蔵蔵凡四通のうちの一通）。この袖判下知状は「土佐国大忍里庄東河末延石船大明神」に年貢以下万雑公事を寄進し、その四至を定めたもの。石船大明神は「清遠ヤシキ」にも近い、現在の高知県香南市香我美町山川の天忍穂別神社に比定される（『日本歴史地名大系 高知県の地名』）。近世にはここで、「御石舟社正和四年（乙卯）二月日物部末近・「御石舟社（檀那物部末延万介尉殿・神右衛門尉殿、天正六年戊寅二月二日）」と記された二枚の棟札（竈四三・四〇二）と、「貴良川阿弥陀堂応永三十二年佐伯光広」の

銘文を持つ鰐口（蠹一二〇）が採訪されている。文明十五年の物辺太郎左衛門尉道真から末延太郎三郎への譲状（蠹一四七、山北村善藏蔵凡四通のうちの一通）には、「土佐国大忍庄東河末延名田者、御石船禰宜識物辺太郎左衛門住代相伝所帯也」と記される。

(31) 木二三・古六四。

(32) 後に国弘名は、正長元年に記される政所御代官の記録「大里庄山南御分国弘専当名斗代役」（安芸一三〇）に所見があるのみ。

(33) 蠹一〇五（槇山左平太蔵凡廿九通のうちの一通）。

(34) 蠹一二三（槇山左平太蔵凡廿九通のうちの一通）。

(35) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）二四二・二四三頁・二七〇―二七一頁、注9論稿（一九九四年）下二二頁。

(36) 吉田注9論稿（一九九四年）下二二頁。なお、細川氏被官の赤沢氏の例として、細川政元の重臣赤沢朝経がある。

(37) 吉田注9論稿（一九九四年）下二二頁が、このように想定する根拠として、槇山光明寺の応永四年寄進置文（拾一〇五、岡内家文書）にみる「自浄観院殿」為「御寄進」也の記述がある。吉田はこれを「細川右京大夫頼元」からの寄進と理解するが、細川頼元の法名は「妙観院」であり『大日本史料』七編之二、応永四年五月七日、同じく近世に光明寺で採訪された位牌の一つ（木四五四）には「浄観院殿前阿州太守高林秀公大禅定門神儀」とあることに鑑みれば、吉田の説は根拠の一端を失う。ただし、大忍庄が細川氏の影響下にあったことは、応仁二年の細川勝元書状（安芸一七三）などから大筋において首肯される。

(38) 『大乘院寺社雑事記』『蔭涼軒日録』等。

(39) 安芸二八・一六二と安芸一六九はいずれも一つ書の書き上げで、各条の表現は「是たいくつ仕候」「百姓たいくつ仕候」などと一致し、内容においても「京夫」や「京田舎のはたらき」における百姓の負担に触れる。

(40) 安芸二八・一六二は、「安芸御政所殿」を宛所とする以上、中世の安芸氏に伝来したものとも想定できるが、「安芸文書」には中世の安芸氏に関する文書と断定できるものがなく、宛所を欠く安芸一六九の伝来も踏まえて、ここでは案文として山川新左衛門を経由して伝

来したものと解しておく。なお、この時期の安芸氏は、大忍庄の領主と名主層を繋ぐ立場にあったといえるが、その検討は他日の課題とせざるを得ない。

(41) 元を通字とする安芸氏の縁者と思われるが、吉田注9論稿（一九八〇年）が論じるように、人物を比定するだけの確証がない。

(42) 『地方史料』は「安年」と翻刻するが、この「年」の字形は「文明六年」のそれと異なり、むしろ安芸一七八の翻刻「専当あね」の字形と一致する。

(43) 横川注4書（一九五九年）、三六頁。

(44) 目良裕昭「豊臣期城下町安芸の形成と朝鮮出兵」（『海南史学』五三、二〇一五年）。

(45) 安芸市立歴史民俗資料館編『安芸市立歴史民俗資料館図録』（一九九五年）。

(46) 『日本歴史地名大系 高知県の地名』（一九八三年）「畑山村」「田岸寺跡」の項。近世には、鎮守水口神社で天文二十一年の橘元綱を大檀那とする棟札（木二〇二、「南路志」）が採訪され、田岸寺では「土州安芸郡畑山村蓮岸寺者、正応元（戊子）開基也、法名以蓮岸為三寺号」、俗名以康信為三山号、故禰康信山蓮岸寺、往古当寺者禪林曹洞宗、近寛文年中改為三真言地、仍其事記三牌後二者也の銘を持つ「当寺開基蓮岸大禅定門」の位牌（木四一〇）が採訪されている。この田岸寺の位牌は、『史料9』や近世の安芸氏諸系図にみる康信を畑山氏の開祖とする理解と一致する。

(47) 吉田注9論稿（一九八〇年）一二〇頁。

(48) 横川注4書（一九五九年）三七頁。

(49) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）三〇六頁は、安芸一五四にみる「せんとのもんそ」を「専当の文書」すなわち「いわゆる東川東分専当に関する文書」と解し、畑山氏が丸山某を仲介人として東川専当職の文書を獲得し、さらには山川新左衛門がこの畑山氏を介して東川専当職を獲得したと想定する。しかし、安芸一五四が記された宝徳二年は、安芸一四一で東川専当職の文書が東川専当新左衛門殿に売却された永享十一年から、およそ十年を経ており、この時点で畑山氏が「専当の文書」獲得の仲介人に礼銭を支払ったとは考

え難い。同様に、『高知県史 古代中世編』（一九七一年）山本大執筆五八四頁や吉田注9書（香我美町史、一九八五年）二四七頁も、山川新左衛門が畑山氏と「強力な結託」を結んだとの見解を示すが、十分な史料の根拠を求め難い。

- (50) 石井「身曳きとゝいましめ」（網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫編『中世の罪と罰』講談社、二〇一九年、初出一九八三年）。近年では、安野眞幸が、身曳状の執筆された背景に、検断の場である市場とそこで活躍した筆師の存在を論じている。安野『日本中世市場論』（名古屋大学出版会、二〇一八年）第五章参照。

- (51) 高知県編『高知県史 古代中世編』（一九七一年）山本大執筆六八〇―六八二頁。山本はこれらの史料に加え、一条教房が京都の邸宅造営のため土佐の材木を取り寄せた記事（『大乘院寺社雜事記』文明十一年三月二十五日条）を引く。

- (52) 『地方史料』『行宗文書』三〇。本史料に関しては、横川注4論稿（一九五七年）、甲藤注10論稿での言及がある。

- (53) 『地方史料』収載『行宗文書』中世分五十点の原本は現在、オーテピア高知図書館（高知市）に収蔵される。なお、『行宗文書』の現況については、荒田雄市氏が「行宗文書 原本調査報告」（奥四万十山の暮らし調査団編注15書）において詳細な分析を行っている。併せて参照されたい。

- (54) 竈七八一（安喜浜介九郎蔵）。

- (55) 目良注44論稿は、「安芸氏が畑山氏を服属させ、安芸川上流域を直接支配下に組み入れた」時期を、水口神社に残された橘元綱の棟札（注46）の年紀、天文二十一年を「それほどさかのぼらない時期」と考証する。

- (56) 安芸二六（前掲）に「安芸庄八多山」とみえ、【史料11】に「安芸畑山」とみえる。中世に畑山の地が安芸庄の領域と観念されたことは注目されてよい。

- (57) 横川注4論稿（一九五七年）一頁。

- (58) 『地方史料』『行宗文書』一一・一五―一七。

- (59) 安芸四六には「仕候者也、文安三（丙寅）二月廿九日 行宗新兵衛（略押） せくいちミフ 若 □□」の異筆奥裏書部分がある。荒田

注53論稿は、この部分の記述をもって、文安三年に安芸四六が安芸氏の手に渡ったことを想定するが、文書移動の要因はむしろ【史料11】に求めるべきだろう。当該部分を、ことさらに畑山氏や安芸氏と関連づけて解する必要はないと思う。

- (60) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）三〇〇―三〇一頁。

- (61) 拾一四二（槇野山郷小松直之丞蔵）。

- (62) 土佐国編年記事略卷四。

- (63) 横川注4書（一九五九年）四二頁。

- (64) 清遠氏は山川氏の出現以後、『長宗我部地検帳』大忍庄地検帳山川分上村五良左衛門給地の項に清吉丞の名前が見えるまで史料に現れない。横川注4書（一九五九年）一四〇―一四一頁参照。

- (65) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）三〇八頁。

- (66) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）三〇六頁。

- (67) 吉田注9書（香我美町史、一九八五年）二九九頁は、斎藤河内入道について、「恐らく山南地区居住の者」と推定する。なお、近世の『安芸家譜略抄』は、斎藤河内・佐竹右兵衛・別役新介・拱山紀伊・岡林将監・専当一類・専光寺馬丞・小川新左衛門・小谷左近右衛門を、安芸落城時の「返忠之人」「安芸家老」とする。

- (68) 荻慎一郎ほか編『高知県の歴史』（山川出版社、二〇一二年）年表。

- (69) 天文十六年五月二十一日長宗我部国親感状（竈二二九）は、村田氏に対して「於今度大忍二無二比類二高名共候、神妙之至候」と賞したものの。大忍庄が安芸氏と長宗我部氏の境界地帯となったことを示す。

- (70) 東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号）2075-315。注70〜73はいずれも東京大学史料編纂所ウェブサイト公開される。

- (71) 東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号）2075-921。

- (72) 東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号）2075-920。

- (73) 東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号）2043-42。

- (74) 東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号）2075-369。

- (75) オーテピア高知図書館（高知県立図書館）収蔵「安喜家資料 一（五）（資料識別ID）LH100100065〜LH100100069。同資料の写真データは、同館より入手可能である。

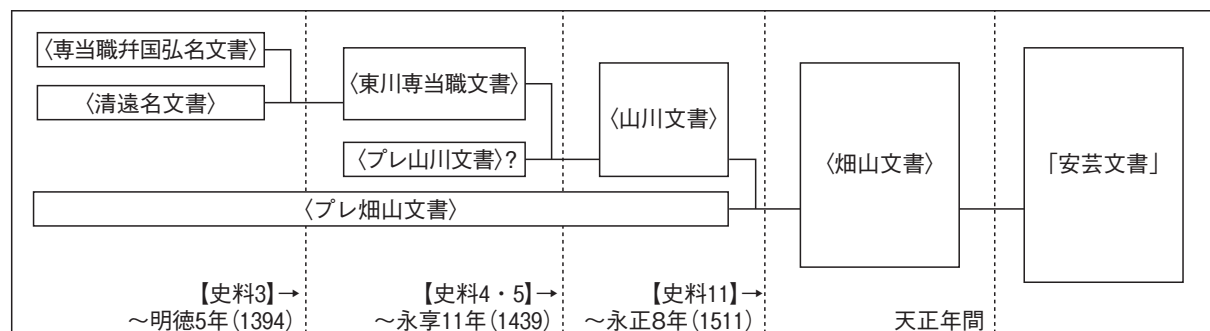
- (76) 山本大校注『四国史料集』（人物往来社、一九六六年）等に収載。
- (77) 注20参照。
- (78) 吉田注9論稿（一九八〇年）一一〇―一一一頁。
- (79) 吉田注9論稿（一九八〇年）八九頁。
- (80) 本稿筆者は以前、大忍庄「柳瀬文書」においても、近世に中世年号の文書が筆写され、その写が文書群へ混入されたことを論じた（『柳瀬家文書』原本調査結果を論じて近世の文書書写に及ぶ）第一〇回中世地下文書研究会、令和元年（二〇一九）十月十四日、研究報告。後日の成稿を待たれたい。
- (81) 蠹八八。
- (82) 拾九九。
- (83) 近代における「安芸文書」の伝来は、吉田注9論稿（一九八〇年）一一四―一一五頁参照。
- (84) 西川広平「耕地開発の展開とその担い手」『中世後期の開発・環境と地域社会』（高志書院、二〇一二年、初出二〇〇九年）。
- (85) 吉原弘道『地域資料叢書3 青方文書の研究』（服部英雄研究室、一九九九年）。
- (86) 拙稿「任官料足請取状（饗料腰差酒肴）請取状」の検討」（『古文書研究』九一、二〇二二年）。
- (87) この点は大忍庄の関連文書に起請文が少ないことと関わりと考える。なお、近世の槇山郷では、郷鎮守である塩峯公土方神社（香美市物部町山崎）と岡ノ内天ノ神（香美市物部町岡ノ内）で組織的な祭祀が行われた。前田良子『披山風土記』の一考察」（『海南史学』二九、一九九一年）、秋澤注13論稿、参照。
- (88) 例えば『地方史料』『行宗文書』二七は「行宗名主職」の「証文廿八通」を譲渡したもので、【史料4】【史料5】と同じく、文書の移動を示す。『地方史料』『末延文書』六は、惣領―庶子の関係を文書で確認したもの。『地方史料』『小松文書』五（蠹七八）は、専当の主張を「所見無」と退け、資安の帯びる文書の証言を容れたもの。同一二（蠹一一六）は、槇山内国光半名の「数通之支証」焼失を確認したもの。

【表】 16世紀後半の安芸氏発給文書・奉納棟札

発給者	番号	年号	西暦	月	日	類型	文書群 / 棟札所在寺社	内容	同文
元盛	蠧 259	弘治元	1555	2	26	名字状	魚梁瀬村五左衛門蔵 (山本家文書)	受給者を「やなせ三郎左衛門尉」とする。	安芸 204
	拾 177	弘治元	1555	4	10	書状	野根村寺尾源之進蔵	寺尾内蔵助殿に穴内番手を申し付ける。	
	拾 176	天文 24	1555	閏 10	18	棟札	清水寺棟札	清水寺金堂 / 大檀那橋元盛	
	竹 70	天文 24	1555	12	13	名字状	江川村忠兵衛蔵	受給者を「彦兵衛尉」とする。	
	木 205	弘治 2	1556	11	25	棟札	奈比賀村天満天神	有井天満天神御宝殿 / 大檀那橋元盛・同土与松女	
国虎	蠧 273	弘治 3	1557	12	12	棟札	安喜浜八幡棟札	安芸八幡 / 大檀那地頭橋国虎蔵助殿・孫衛門殿	
	蠧 288	永禄 3	1560	7	7	書状	馬上村長崎氏蔵 (長崎家文書)	長崎内蔵助殿に和食西分の使職を申し付ける。	
	蠧 308	永禄 6	1563	12	23	名字状	赤野村甚左衛門蔵	受給者を「谷岡源左衛門尉」とする。	
	竹 74	永禄 10	1567	2	28	書状	江川村忠兵衛蔵	川竹弥八郎に新城定番を申し付ける。	
	蠧 344	永禄 12	1569	7	7	感状	馬上村長崎某蔵 (長崎家文書)	籠城に馳籠る長崎内蔵助殿を賞する。	
	蠧 345	永禄 12	1569	7	7	感状	馬上村長崎某蔵 (長崎家文書)	籠城に馳籠る井町源七郎殿を賞する。	
	拾 195	永禄 12	1569	7	8	感状	山田村町大工與平蔵	籠城に馳籠る宗次平五郎を賞する。	
千寿丸	蠧 353	永禄 13	1570	6	吉	安堵状	魚梁瀬村五左衛門蔵 (山本家文書)	屋奈瀬修理助の望む馬路跡目を安堵する。	安芸 205
	蠧 354	永禄 13	1570	8	26	安堵状	魚梁瀬村五左衛門蔵 (山本家文書)	角田与三左衛門尉殿に角田跡目を安堵する。	安芸 206
	蠧 360	元亀 2	1571	10	17	感状	馬上村長崎某蔵 (長崎家文書)	退却に従う長崎内蔵介殿を賞する。	

*番号・文書群 / 棟札所在寺社…『高知県史 古代中世資料編』の史料番号・近世編纂史料集の採訪情報。()内は高知県史の採訪情報。
 *文書名…引用者の恣意による。*天文 24 年から弘治元年への改元は 10 月 23 日。

【図 1】「安芸文書」の包摂過程



【図 2】「安芸文書」の包摂関係



* 1~313 は『地方史料』「安芸文書」の文書番号。